

『実例詳解古典文法総覧』補遺稿

連載第 28 回 第 7.4.6.2 節～第 7.5 節

2019 年 2 月 15 日

小 田 勝

214 頁「7.4.6.2 実現不可能なことへの希望を表す単独の「まし」から。用例を追加する。

- ・見る人もなき山里の桜花ほかの散りなん後ぞ咲かまし (古今 68)

215 頁用例(4)について、「ましを」の例もある。

- ・妹が家も継ぎて見ましを大和なる大島の嶺に家もあらましを (万 91)

同頁「7.4.6.3 ためらいを表す単独の「まし」の類例を追加する。

- ・「いかにせまし…。なほこれより深き山を求めてや跡絶えなまし」と思すにも(源・明石)

なお、用例(6)は「ためらい」と関係ないから、連体修飾の「まし」のところ(205 頁用例(6)～(10)のところ)の補足説明とすべきであった。同頁「7.4.6.4 「む」と同義の「まし」の用例(1)～(3)の類例を追加する。

- ・うれしとや言はむ、またわびしとや言はましなど思ふに(とはずがたり)

216 頁「7.5 確述」。下から 14 行目の「確かにありましようか」を、「確かにあるだろうか」に訂正したい。同頁 2 つ目の◆の類例を追加する。

- ・さだめて御祈りのことありなんと待つに(宇治 14-9)

「確述」では、いくつかの句型を追加する。217 頁用例(6)～(9)の類例、

- ・いざかくてをり明かしてむ冬の月春の花にも劣らざりけり(拾遺 1146)

疑問文中の例、

- ・灯火の(=枕詞)明石大門に入らむ日や漕ぎ別れなむ家のあたり見ず(万 254)

法助動詞が仮定を表す例、

- ・心地のいみじう悩ましきかな。やがて直らぬさまにもありなむ、いとめやすかりぬべくこそ。(源・夕霧)

- ・[源氏ヲ]絶えて見奉らぬ所にかけて離れなむも(=遠ザカッテシマウトシタラ、ソレモ)、さすがに心細く[中務君ハ]思ひ乱れたり。(源・末摘花)

法助動詞が婉曲を表す(推量・意志・仮定を表さない)例、

- ・新院 (=崇徳上皇) 日ごろよりいかなるべき身の有様やらんと思し召しけれども、出家してん上は (=出家シツル上ハ) さしも罪深かるべしとも覚えず、都近き山里などにぞ押し籠められんずらむと思し召しけるに (保元・金刀比羅本)

法助動詞が行為要求 (§ 8.3.2) を表す例、

- ・実因僧都、源信内供に言はく、「今は疾くこそ始め給ひてめ。なんぞ遅くなるぞ」と。(今昔 14-39)

用例(13) (14)に関連して、次のような「ぬべし」は、「(あやうく) …ところだった(が、そうならずには済んで良かった)」の意を表す (佐伯梅友 1984 参照)。

- ・今しばしかくあらば、波に引かれて入りぬべかりけり。(源・須磨)
- ・ここ (=明石) にも、よろづ所狭きまで [姫君ノ五十日ノ祝イヲ] 思ひ設けたりけれど、この (=京カラノ源氏ノ) 御使ひなくは、闇の夜 [ノヨウナハカナイ有様] にてこそ暮れぬべかりけれ。(源・湊標)
- ・かかる [玉鬘ノ美シキ] 御さまを、ほとほと [筑紫ノ如キ] あやしき所に沈め奉りぬべかりしに (源・玉鬘)

少し余白があるので、第7章の補足を少々。「7.2.1.3 「べし」の否定」の180頁、用例(9) (10)の類例を追加する。

- ・この世にはまたも逢ふまじ梅の花ちりぢりならむことぞかなしき (詞花 363)

187頁第7.2.3.2節の節の名称について、「断定「なり」」に「の」を入れて、「断定の「なり」」とする。「7.3.1.3 むず」の196頁、用例(5) (6)の類例を追加する。

- ・推参にやあらむずらん。(明月記・建久 9.12.10、平仮名書き部分)

次例は、中古の「むずらむ」の例である。

- ・「あはれ、いかにし給はむずらむ」と、しばしば息の下にもものせられしを思ひ出づるに (蜻蛉) <『蜻蛉日記』には、ほかに、新全集の140頁、201頁、222頁に「むずらむ」の例がある。>

200頁「7.3.2.2 伝聞の「らむ」の用例(1)の出典の後に、「<古^{いにしへ}に恋ふる鳥かもゆづるはの御井の上より鳴き渡り行く>へノ返歌>」という注記を追加する。

これで、「第7章 推定・推量」の補遺稿を終え、次回からは第8章に入る。

[引用文献追加] 佐伯梅友 1984 「初音の巻から二題」『むらさき』21